

1 自主的な課題追究がなされるように配慮した授業展開例 1

教科(科目)	日本史 B	単元名	歴史の考察
本時の主題	日本の食文化における外来の食		(3時間目 / 3時間)
本時の目標	(1) 食事という身近な事例をもとにして、課題解決への予想を立て、自ら追究しようとする。【関心・意欲・態度】 (2) 日本人の食生活が、日本独自に形成されたものではなく、歴史的過程と深く関係し、外来の食材や調理法などと融合されながら形成されたことに気付く。【思考・判断】 (3) 調べた内容をレポートにわかりやすくまとめ、発表する。【技能・表現】 (4) 既習の知識を、問題解決にむけて有効に活用する。【知識・理解】		
指導のねらい	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価	
・何が日本的な食かを考える。 ・日本的と考えた食について調べて追究する。 (1～2時間目) ----- (本時) ・調べた内容についてわかりやすく発表する。 ・各発表の要点をまとめる。 (30分) ・食の外来が活発になっている時期を理解する。 (40分) ・日本の食に関する特徴に気付く。 (45分) ・自己評価や感想をまとめる。 (50分)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> ・何が日本的(伝統的)な食であるのかまた、それらを構成する食材や調理法がいつ頃から日本で行われていたのか考える。 </div> ・根拠を示しながら仮説をたてる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> ・自分がたてた仮説を調べて検証する。 </div> ・同様の発想をした生徒ごとにグループを作り、協力しながら仮説を検証する。 ・調べる内容 <ul style="list-style-type: none"> ・食材や調理法 ・外来のものであるならば、いつ頃、どこから流入し日本に定着したのか。 ・どのような経過を経て今日のような食が形成されたのか。 ・意外な発見。 ・何を使って、どのように調べればよいかを考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> ・調べた内容をレポートにまとめ、発表する。 </div> ・どのように発表するかをグループで話し合い、必要な資料を作成する。 ・調べた内容について、グループごとに発表する。 ・各発表に対する各自の予想を事前に行う。 ・各発表の内容をまとめ、自分の予想と対比する。 ・各自が調べた食・食材がいつ頃日本に定着したのかを年表に記入する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> ・食材や調理方法などが日本に定着した時期に共通性がないか、また、どの時期に食の外来が特に活発になっているかを考える。 </div> ・食の外来が特に活発になっている時期、また、食材や調理方法などが日本に定着した時期に共通性がないかを考える。 ・日本が中国を中心とするアジア諸国や欧米の国々との交流を活発化した時代と関連づけて考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> ・当初にたてた仮説と対比する。 </div> ・日本的といえる食・食材が何かを考える。 ・日本的といえる食・食材の多くが長い年月を経ながら日本の風土や嗜好にあわせて独自の食に発展したことに気づく。 ・本時の感想や気付いたことを記すとともに、自己評価を行う。	既習事項を活用して予想を立てる。 <評価方法> 挙手、発言 【関】 各自が関心をもった日本的な食について調べる。 調べ方についても考えさせる。 <評価方法> レポートを提出させ確認 【思】 調べた内容をわかりやすくまとめさせる。 より効果的な発表の方法を考えさせる。注4 他者の発表もよく聞かせ、理解を深めさせるようにする。注5 <評価方法> 発表、プリント記入、提出させ確認 【技】注7 日本的と思っていた当初の予想との違いに気付かせる。 食の外来と日本や世界の歴史との関係に気付かせる。注8 日本の食の特徴について、当初の予想と対比させながらまとめさせる。 <評価方法> プリント記入、自己評価記入、提出、確認。 【関】【知】注9	

注1
注2
注3

注4

注5
注6

注7

注8

注9

< 指導上のポイントと考察 >

日本人の食文化の特徴を「日本的なものは何か」という問題意識を出発点として仮説を設定させ、具体的な追究を通して仮説を検証させる。そして、その一連の活動によって、日本の食文化の特徴を見つけ出させる授業構造とする。従って、生徒自らに課題を設定させ、そこから生じた疑問を自らの調べ活動によって解決する過程を重視する。教師からの提示は最小限に留め、生徒が自らの調べ活動のなかで問題を解決し、達成感が得られるように導く。また、調べ方、まとめ方・発表の仕方も並行して学べるようにする。

< 生徒の課題追究例 >

生徒が日本的と考えた例として、寿司、天ぷら、納豆、味噌汁、精進料理等があった。天ぷらについては、南蛮貿易によって伝わってきたもので、日本人の好みに合うように変えられてきたものであること、寿司については、古墳時代頃、炊いた魚や貝を米と一緒に漬けこみ、米が乳酸発酵することによって魚貝類の腐敗を防ぐ貯蔵法として伝えられており、平安時代には各国が税で納めるものの中に、鮎ずし、鮭ずしなどの記述が見られるがいずれも魚貝類の貯蔵が主目的となっていること、これが大きくかわり、今日のような寿司となるのが江戸時代で、米飯を発酵させず、酢を混ぜ、ネタを組み合わせたものとなったこと、その背景には、漁業の発展や輸送手段の進歩等が関係していることをあげた。

納豆については、大豆栽培そのものは弥生時代に始まったとされるが、納豆の製法が伝えられたのは古墳時代あたりと考えられること、そして、これも中国、韓国、南アジアなどに広く分布しており、外来の食の一つになること、また、味噌・醤油についても大豆の伝来と密接に関係するため、納豆の場合と重なること、その製法の起源は中国や朝鮮半島で、伝来も古墳時代あたりと考えられること等を発表した。

日本は常に外来の文化を受容しながら取り入れて今日の文化を創り上げてきた。食文化についても同様で、ほとんどのものが外来の食あるいは食材である。その中でも、特に外来の食が日本に受容される時代として、7・8世紀、17世紀、19世紀という3つの大きな“山”があるといわれる。この3つの時代を含め、日本が国際化を果たした時代と重なる。今回のテーマでは、こうした時期を中心に、生徒が調べて発表した内容を起点として、日本の歴史、特に諸外国とのかかわりに着目できるようにした。また、外来した食が日本に定着する仕方にも段階があり、受容・選択・変容・融合といった過程を踏みながら今日の形にたどり着く場合が多く、日本に入っからの長い歴史的過程を無視した単純な比較は困難であることにも気付かせたい。

- 注1 調べ活動は図書館を中心に行うが、書籍類のほかにもインターネットや漫画、テレビ番組などの多様なメディアを活用させる。日本史の学習で活用される資料は「古文書」類が多いが、それだけではなく、映像や写真なども活用させることで興味や関心を高めるようにする。同時に歴史が、様々な資料の読み解きによって成り立っていることに気付かせるようにする。
- 注2 情報機器の活用にあたっては、図書館の司書教諭をはじめとして、複数の先生と協力して行うようにする(ティーム=ティーチング形式の利用)。
- 注3 調べ活動が、グループの特定の個人に押しつけられることがないように、協力して取り組むように指導する。生徒相互に補完しあいながら学習を進めさせ、調べる資料、まとめ方、分かりやすい発表の仕方など、互いに意見を出して工夫させる。そのことを通して、学ぶことの楽しさを実感させたり、一連の学習活動が自己表現の場であることに気付かせる。
- 注4 発表方法はB紙、パソコンによるプレゼンテーション、オーバーヘッドプロジェクターなど、効果的な方法や機器を選ばせ、工夫させる。
- 注5 自己のテーマに対する予想だけではなく、各グループのテーマについても予想を立てさせ、関心を高める。
- 注6 各自が調べた内容についてはよく理解できるが、他者の発表内容について理解が深まらないことがよくあるので、注意深く聞かせるとともに、他者の発表の要点を書き取らせたりまとめさせたりする。また、自分が立てた予想と対比させることで関心・意欲を高める。
- 注7 生徒が調べた内容を利用し、外来の食が活発に流入した時期がわかりやすいように表示できるようにする。また、既習の事項を活用させたり、簡単な時代区分を示すことによって、外来の食が活発に流入した時期がどのような時代であったのか考えさせ、歴史的背景がつかめるようにする。
- 注8 発表内容を利用して、生徒が当初日本的な食と予想したもののほとんどが外来のものであることに気付かせる。また、何が日本的な食かについては、歴史的な発展過程と密接に関係しており、粹組み作りが難しいことに気付かせる。
- 注9 自己評価は生徒自身に取組の姿勢を振り返らせるとともに、この授業が生徒の関心・意欲、あるいは理解をどの程度深めることができたかを検証するために行う。感想は、生徒の理解度や思考力が授業実践以前とどう変わったかを知る手がかりとなるように実施する。